

2・23

34th

サタデープログラムニュース

講座番号 21 番 第 3 部 (14:00~15:30)

世界の高齢化社会に貢献！

あざらしロボット「パロ」

講師 柴田崇徳さん



産業技術総合研究所のサイエンススクエアに
展示されているあざらしロボット「パロ」

開発者 柴田崇徳さんの略歴

1992年、名古屋大学大学院博士課程電子機械工学専攻修了 博士(工学)。1993年、通商産業省工業技術院機械技術研究所ロボット工学部研究官。1995~98年、MIT AI Lab. 研究員兼任。2001年~ 産業技術総合研究所主任研究員。現在は人間情報研究部門で上級主任研究員や MIT 高齢化研究所で客員研究員を務める。

● 世界で活躍する「パロ」

あざらしロボットの「パロ」をご存知ですか？

パロは世界で唯一、人を癒すために開発されたロボットで、「世界一癒されるロボット」としてギネスに認定されています。パロの特徴は、ロボットであると感じさせないような柔らかな触り心地と、撫でたり、抱っこしたりすると、鳴き声を出して、まるで本物の動物のように反応を示してくれることです。

動物の形をしたロボットというと、ペットを思い浮かべる方が多いと思いますが、パロはペットとして使われることを最大の目的としたものではありません。

パロは、認知症などの知覚的な障害を持たれている方を癒すために開発されたロボットです。アメリカでは2009年にFDA（食品医薬品局）で医療機器として認定され、また昨年、公的医療保険「メディケア」の保険適用対象となっています。また、ヨーロッパではたくさんの介護施設にパロが導入されています。パロは世界で活躍しているのです。

● 動物が患者を癒す「アニマル・セラピー」

パロが医療機器として認められ、保険が適用されるのは、アニマル・セラピーという認知症やPTSDなどの病気への治療法と同じ効果が期待されるからです。

アニマル・セラピーというのは欧米では広く知られている治療法で、知覚的障害を持つ患者が動物と触れ合うことで症状が改善されるというものです。動物と触れ合うだけで症状が改善するため、薬の投与を減らせるという利点があります。しかし、アニマル・セラピーには、感染症リスクや、一頭を飼育するのにコストがかかるといった問題もあります。

その点、パロはそれらの問題は一切無く、今まで感染症リスクを懸念してアニマル・セラピーを行うことが難しかった病院や介護施設での治療に役立っています。

パロは今後、ヨーロッパや日本でも医療機器として認められ、保険が適用されるものになることを目指しています。

● 当日は…

当日は、日本ではまだあまりなじみのないアニマル・セラピーについてや、パロを開発する上での苦労などについて開発者の柴田崇徳さんにお話ししていただきます。

また、柴田崇徳さんにパロ2体を持ってきていただき、教室で展示いたします。

皆様のご参加をお待ちしています。

（文責 高校 1D 杉浦）



田
い